

ジェイン・オースティン『自負と偏見』

宮崎 孝一

(1) その愛と結婚

(a) コリンズ夫妻

『自負と偏見』(Pride and Prejudice, 1813)に描かれる結婚の中で、その成立に恋愛の要素が最も少ないのが、コリンズ夫妻 (the Collins) のそれである。この小説の冒頭の有名な句、

It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife.

(独りもので財産を持っているとなれば妻を探しているに違いないというのが、世間一般の公認真理である。)

は、コリンズと結婚する二十七歳のシャーロット (Charlotte Lucas) の場合に置き換えれば、次のように言うことができよう。

It is a truth universally acknowledged, that a single woman without a fortune, must be in want of a husband.

シャーロットの父サー・ウィリアム・ルーカス (Sir William Lucas) は元来、商売で金をもうけ、王に申請してナイトにも叙せられた男であるが、弟妹もある彼女としては、父亡き後の自分の生活について安心しては行かない。その彼女にとって (当時の他の多くの女性たちと同様)、将来の生活の安定を図るほとんど唯一の途は結婚である。彼女は頭のよい女性であるが、結婚の根底に恋愛を前提としない点で、彼女の伶俐さはある種の徹底ぶりを見せている。彼女は、結婚前に相手の気心を知って置くなどということは結婚の幸福にとって無関係だと友人のエリザベス (Elizabeth) に説く。

「結婚生活の幸福なんて、まったく運次第よ。結婚前にいくら相

手の気性を互いに知り合っていたところで、また、どんなに性分が似通っていたところで、そのために幸福が増すなんてこと、全然ありやしないわよ。結婚したあと、必ず二人の似ていない所の方が目立つようになって、いらいらする種が生まれて来るに決まってるわ。だから、一生を一緒に過ごそうという人の欠点など、できるだけ知らないでいた方がいいのよ」(I, vi)。

シャーロットの結婚する相手、ウィリアム・コリンズ (William Collins) 牧師は、エリザベスの従兄に当たるが、エリザベスの父ベネット氏 (Bennet) の財産は限定相続 (entail) によって、このコリンズに譲り渡されることになっている。そこで、コリンズは、この限定相続によるベネット家の損害を、できる限り緩和しようとの目的だと称して、最初ベネット家の長女ジェイン (Jane) と結婚しようと考えたが、彼女に既に相手が決まりかけていると聞いて、急遽次女エリザベスに鞍替えしようとして、心底を見すかされ、エリザベスに拒絶された前歴がある。何が何でも妻を見つけることを決心していた彼は、次には紹介されたばかりで交際の浅いシャーロットに求婚し、望みが叶えられることになる。シャーロットが、生活の安定のために、極言すれば prostitution とも呼べそうな結婚に踏み切ったのと同様、コリンズも、牧師としての身分に箔をつけるための妻としての女性を物色するに当たって、その女性の資質や、互いの理解、共鳴の程度などには甚だ大まかな考えしか持っていなかったのであった。

婚約や結婚の根本に愛情を必須と考えるエリザベスにとっては、シャーロットの進退は理解に苦しむところであった。かつては親友としてつき合った二人であったが、今では心置きなく語り合う間柄ではなくなった。

エリザベスとシャーロットとの間には、あるわだかまりができて、結婚の問題には互いに触れようとしなかった。エリザベスには、二人の間には、二度と再び本当に打ち解けた関係が生まれることはあるまいと思われた (I, xxiii)。

コリンズ夫妻が牧師館に落ち着いた後、エリザベスは招かれて、そこ

の客となる。彼女がそこで見るのは、無神経で傲岸なコリンズの言動をできるだけ気かけずに、心の平和を保とうとしているシャーロットの努力であった。

こんな男と一緒に住んで、よくもあんな楽しそうな顔をしていられるものだと、エリザベスは呆れてシャーロットを見ていた。シャーロットが当然恥ずかしくなりそうなことをコリンズが言い出すことが稀ではなかったが、その度にエリザベスは思わず彼女の方を見てしまうのだった。彼女が一、二度は微かに顔を赤らめるのが見て取れたが、大抵は賢明にも、聞こえないような振りをしていた(II, v)。

シャーロットは、これだけの犠牲を払って、「なんとか家を持ちたい」という願いを満たし、牧師夫人としての体面を維持しているのである。

話は戻るが、コリンズがエリザベスに求婚して断られたとき、自信の強い彼は、女性が求婚されたとき、一度、時には数回断るのは社交上の儀礼であって、本心では彼女は自分と結婚したいのであると思いつ込んでいた。何度目かに断られたとき、コリンズは次のように言う。

「こういう風に考えさせていただきます。あなたのお断りは、ただ世間の仕来りに従ったに過ぎないでしょう。僕がそう信じる理由は簡単に申せばこういうことです——僕という人間はあなたに受け入れられるのにそう不似合いな相手だとは考えられないこと、僕が提供しようとしている家庭生活は決して不十分なものではあるまいということです。僕の社会的地位、[僕が眷顧を受けている]ディ・バーク家との関係、またお宅との関係も、大いに僕の株を上げる材料になると思われれます。また特にお考えいただきたいのは、あなたは沢山に魅力を持っていらっしゃるようですが、しかし、今後また結婚の申し込みがあるかどうかは決して確かではないということです……」(I, xx)。

コリンズのこのような独善的な発言は、さなきだに彼を嫌っているエリザベスの心を更に遠ざけるのに十分であった。

こういう粗雑な神経の持ち主であるコリンズに、前に見たようにシャーロットは和合するための精いっぱい努力をしているわけである。その結果がうまく行っていることは、コリンズが誇らしげにエリザベスに語る次の言葉からも察せられる。

「家内と私とは心も一つ、考え方も一つなのです。二人の間には、何事につけても、性格、発想の驚くべき一致が見られますので、二人は元々一緒になるように造られたのではないかという気がいたします」(II, xv)。

シャーロットの演技は、いつか本物に近くなったのであろうか。

(b) ベネット夫妻

この小説の中心をなすエリザベスを始め五人の姉妹の父親であるベネット氏の結婚生活については次のように述べられている。

若さと美貌と、また、若さと美貌が通例与える朗らかそうな外見に魅惑されてベネット氏が結婚した相手は、知能も弱く、狭量で、そのため、彼女に対する彼の真の愛情は結婚生活のごく初期に冷めてしまった。尊敬、尊重、信頼などの念は永久に消え去り、家庭の幸福について彼が考えていたことはすべて覆えられてしまった。しかし、ベネット氏は、自分の無思慮によって招いた失望を慰めるのに、世によく見られる例だが、自分の愚かさや非行が元で不幸に陥った男たちがしばしば赴くような種々の快樂に逃避するという型の人ではなかった。彼の愛するものは田園と本だった。彼の主要な楽しみは、そこから生まれていたのである。妻から受けている恩恵とは言えば、彼女の無知と愚かさなどが苦笑を誘ってくれるという以外にはほとんどなかった。こういうのは、世間一般の夫が妻に求める種類の幸福ではないが、他に楽しませてくれる能力が相手にないとなれば、真の諦観者は、現にあるものから利益を引き出そうと考えるのである(II, xix)。

ここに見られるように、シャーロットの場合とは違って、ベネット氏の

結婚には初めは浅薄な意味での恋愛感情があったのであった。しかし、それが一種の悲劇的結婚生活に移行していったのが余りにも早かったのである。

ベネット氏と、その妻との特徴が非常にはっきり表れるのは、ベネット家の末娘で十六歳のリディア (Lydia) の駆け落ちと結婚に際してである。リディアは、近所の町メリトン (Meryton) に駐屯している市民軍の将校ウィッカム (Wickham) と親しくなり、やがて市民軍がブライトン (Brighton) に移動すると、彼女もブライトンへ行きたいと駄々をこねる。長女ジェインと次女エリザベスとは、無思慮なりディアの日常を知っているので、彼女のブライトン行きを許さぬよう父親に頼むが、父親の返事は次の如くである。

「リディアは、広い世間で何か大恥をかくまでは、まともにはならないだろうよ。今の生活で家族にかけている出費と迷惑ぐらいで何とかしてくれるとは到底思えないね」(II, xviii)。

この言葉は、父親の、リディアに対する影響力に関する諦めを示している。姉たちの危惧通り、リディアはブライトンの止宿先から、ウィッカムと何所へとも知れず駆け落ちし、家族のみならず、親戚、知人たちに心配をかけることになる。ベネット氏はリディアを探しにロンドンへ行くが、実行力に乏しい彼は何ら為す術もなく、空しく家に帰って来る。エリザベスから、ねぎらいの言葉を受けたとき、彼は次のように答える。

「もうその話はよそうよ。わたし一人が苦しめばいいのさ。わたしが元で起こったことなんだからね。わたしが苦しむのが当たり前なんだ。……自分がどんなに間違っていたか、一生に一度よくよく考えさせてみてくれ。思いつめて参ってしまうなんていう心配はない。こんな気持ちも、すぐ過ぎ去ってしまうものだからね」(III, vi)。

現実よりも、思索が生活の中心となっているベネット氏は、娘の逐電という事件に際しても、こういう諦観的な反応しかできないのである。また、世間の口のうるささに関してはエリザベスに次のように言う。

「われわれは何のために生きているのかね。隣人たちが面白がるような失策を演じ、次にはこちらが相手の失策を笑ってやるためなんだよ」(Ⅲ, xv)。

ベネット氏は一種シニカルな悟りに達した人物と言うべきであろう。

さて、ベネット夫人は、どういう女性であろうか。彼女の人生の最大関心事は、娘たちが早く結婚してくれることである。それ故、エリザベスがコリンズに求婚されて、母親には分からぬ理由で断ったときの彼女の落胆と憤慨は非常なものであった。しかも、そのコリンズが、シャーロット・ルーカスと結婚したことは、ベネット夫人にとって甚だ腹に据えかねることであった。彼女はルーカス家とは前々から対等に親しくつき合っていたのであるが、ベネット氏が死亡した場合には、例の限定相続によって、ベネット家の財産はすべてコリンズ家のものとなり、ベネット夫人は、その令夫人となったシャーロットおよびその母親のルーカス夫人の麾下に就かねばならなくなるからである。

次に、末娘リディアがウィッカムと親しくなったとき、ベネット夫人は大変喜んだ。どんな相手かなどは眼中になく、これで娘の一人が片づくだろうと想像したからである。ところが、世の常の結婚への道を進まず、二人が駆け落ちしたため、夫人の、動顛、狼狽ぶりは言語に絶するものがあつた。ベネット氏がリディアを探しにロンドンへ向かった後、彼女は娘たちや親戚のガーディナー氏 (Gardiner) に向かって次のように嘆く。

「お父さまはロンドンへお出かけになつたし、いずれウィッカムと出会い次第、決闘ということになるわよ。そうなれば、お父さまは刺し殺されておしまいになるに決まっているし、その後、私たちはどうなっちゃうんだらうねえ。お父さまが、お墓の中でまだ冷たくもならないうちに、コリンズ夫婦が、この家から私たちを追い出してしまふだらうよ」(Ⅲ, v)。

このように、ベネット夫人の悲観的予想は極端だが、ガーディナー氏やダーシー (Darcy) の尽力で、リディアとウィッカムが結婚するとな

ると、彼女の態度はガラリと変わり、リディアとウィッカムとの、それまでの不屈きな行状もすっかり忘れ、二人の結婚後の生活のことも彼女の頭を悩ますことはない。ただ彼女の頭を占めるのは、リディアの式服その他の衣裳の注文のことばかりである。

ベネット夫妻は、方向こそ違え、そろって現実離れのした夫婦というべきであろう。

(c) ウィッカムとリディア

魅力的な容貌と優雅な挙措の持ち主で、人との応対も如才ないウィッカムは、これまでに多くの女性たちの心を惹きつけてきた。ダーシーの妹のジョージアナ (Georgiana) は、危うく彼と駈け落ちするところだったし、慎重なはずのエリザベス・ベネットも一時は彼に夢中になった時期があった。その他、彼をめぐる女性の数は数え切れないほどであった。

それらの女性に囲まれて、ウィッカムは特にある女性に熱中するということはない。メアリー・キング (Mary King) に接近する時もあるが、これは彼女が10,000ポンドの遺産を受け継ぐことになったからであった。その他の場合にも、彼の行動には経済的打算が多い。その彼が特にリディアと駈け落ちすることになる動機は何所にあるのであろうか。

ダレル・マンセル (Darrel Mansell) は、リディアの生態について次のように言っている。

リディアは一種の camp follower (軍隊について歩く売春婦) なのである。連隊の移動後、彼女がすかさずブライトンに現れるのもそれで説明がつくし、また、母親が、「リディアが皆さんと知り合いで、気に入っていただいている士官さんも多かった軍隊から離れるのは残念ですわ」と言うのも納得が行く¹⁾。

これは、リディアの尻軽女ぶりを誇張した、うがち過ぎた説かも知れない。しかし、年齢も十六歳で思慮の浅いリディアが、ウィッカムに精神的に恋するというより、彼の性的魅力の虜になって、駈け落ちを決心したということはあり得よう。ウィッカムの方では、さ程乗り気ではなかったが、彼女に押し切られたのであることは、彼がリディアと行動を共

にしたものの、結婚する気はなく、折を見て、もっと金持ちの結婚相手を見つけようと考えていたことから知られる。

ともかく、多くの読者にとって、ウィッカムとリディアとの駆け落ちは、余りにもだしぬけな、理由の稀薄な行動のように感じられるであろう。ウィッカムもリディアも、駆け落ち以外に、もっと賢明な方法はあったろうにという感じがするのである。

しかし、作者としては、この駆け落ちはダーシーとエリザベスの結婚を進めるプロットの上で必要な事件だったのであろう。まず、エリザベスの家族や縁者を毛嫌いしていたダーシーが、種々の経緯の末、気持が変わり、積極的に親しもうという態度に転ずる具体的行動として、エリザベスの妹リディアをウィッカムと結婚させて苦境から救うことになるのであり、それはエリザベスにとって嬉しい驚きであろう。また、生来、頑なで、自分のことを、「他人の愚行や悪徳が、なかなか思うように忘れられない……たぶん、執念深いというのでしょうか。何ごとによらず、いったん駄目だと思い込むと、もう永久に駄目なんです」(I, xi)と言っていたダーシーが、過去に散々自分を手古摺らせたウィッカムのために大金を出して、リディアとの結婚を取り計らってやるのは、彼の人柄が大きく変わり、好ましい人間になったことを十二分に示すものであろう。ちなみに、この折にダーシーがウィッカムのために出した金は約3,000ポンドであったろうというのがマイケル・ウィリアムズ (Michael Williams) の計算である。(ウィッカムの借金の清算、リディアの支度の諸費用、ウィッカムの連隊旗手としての任官辞令費その他を含む)²⁾。

ウィッカムとリディアが結婚したとき、世間の人々は(内心はどうあろうとも)皆祝福した旨が作中に記されているが、その現象についてのエリザベスの感想を、トニー・タナー (Tony Tanner) は次のように代弁して述べている。

エリザベスは、社会の含むアイロニーに関する独特の鋭い感覚で、この結婚の奇妙さを見て取った。それは花婿の人柄を見れば望ましいものではないが、一方、社会の厳格な規範から見れば絶対不可欠なものなのである。公的な妥当性の方が個人の幸福より完全に優先するのだ。結びつきという事実の方が、それを構成する個人より一層重要なのである³⁾。

これは恐らく、作者自身の考えでもあろうと思われる。

この二人が、結婚後、これまでの生き方を改めて、人々に迷惑をかけない堅実な生活に入って行けるかどうかは大きな疑問であるが、エリザベスとダーシーの関係が小説の中心であるので、作者はリディアとウィッカムの結婚生活の将来について詳しく記すことは控えたのであろう。

(d) ダーシーとエリザベス

「まあ、まあって程度だね。だが、心を引かれるほどの美人じゃないな。それに、ほかの男たちから無視されているような女性に、殊更に僕が箔をつけてやるなんて気には、今のところ、なれんね」
(I, iii)。

ベネット家の近隣の町メリトンで催された舞踏会でのことである。踊る相手がなくて坐っていたエリザベスと踊るように友人ビングリー(Bingley)に勧められたダーシーは、上のように言って断る。しかも、当のエリザベスはこの言葉を聞いてしまった。

ダーシー氏は、彼とビングリーとの会話がエリザベスに聞こえるのに十分近い所に立っていたのである (I, iii)。

ダーシーはこの言葉が、エリザベスに聞こえているとは気づかず、若者らしい景気のいい強がりを行ったのだとも考えられるし、あるいは、当人に聞こえようが聞こえまいがお構いなしに、彼はこの言葉を吐いたので、そこにこの小説に登場した頃の彼の傲慢な性格が表れていると考えられることもできよう⁴⁾。

私には前者の見方の方が正しいと思われるが、いずれにしても、ダーシーのこの言葉を聞いて以来、エリザベスはダーシーの尊大な態度、傲慢な振舞と思われるものに強い反感を覚えるようになった。ところが、ダーシーは、相当早い時期からエリザベスに惹かれ始めるのである。

ダーシー氏は、初めのうちこそエリザベスを、ほとんど美人とは認めていなかった。舞踏会の折にも、何とも感じなかったし、次に会ったときも、ただ、あら探しをしてやろうと思って見ていただけ

だった。ところが、あの顔には何の取柄もないと、自分自身に対して、また、友人たちに対しても断言した途端、彼女の黒い瞳の美しい表情によって、その顔立ちがこの上なく聡明に輝いていることに気づいたのであった。一つ長所を見つけると、次々と不本意な発見が続いた (I, vi)。

(美点の発見が、なぜ「不本意 (mortifying)」なのかは、後に述べるダーシーのこの頃の精神状態による。) この後にも、「ダーシーは、運動で上気したエリザベスの顔色の美しさに、すっかり感心して見とれていた」(I, vii) とか「ダーシーはなるべくエリザベスばかり見ないように、努力していた」(I, xv) 等々、ダーシーがエリザベスに惹きつけられていることには数え切れないほど言及されている。

ダーシーがエリザベスに魅力を感じることを警戒する理由は次の文に明らかである。

ダーシーは、こんなにも強く心を惹きつけられた女は、はじめてだと思った。もし、彼女の身内たちが、あんな低い身分の者でなかったら、こりゃちょっと危険な状態だぞと心から思った (I, x)。

ペンバリー荘園の当主として年収10,000ポンドあるダーシーは、幼いときから階級に関して特別の教育を受けたのであった。自分で働く必要のない、豊かな恒産のある紳士こそ最高の存在であって、こういう身分の者は他の社会の者とは、みだりに交際すべきではないという考えであった。エリザベスの叔父の一人はロンドンの商人であり、他の一人はメリトンの弁護士だと聞いた彼は、これは自分の世界の人たちではないと思った。その上、エリザベスの家族の問題があった。取り分け、母親ベネット夫人と、下の三人の娘の軽薄、低俗なことは、ダーシーには堪えられぬことと思われた。彼の論法からすれば、こういう縁者と肉親を持ったエリザベスは彼の心を捉える危険性はないはずなのである。

ところがダーシーは様々な機会にエリザベスに接し、その挙措の軽快さ、才気、いたずらっぽく、屈託のない、物おじしない応対振りなどを日増しに快く感じると共に、前に認めた警戒の必要はますます増大してきた。そして、エリザベスがシャーロットに招かれて滞在していたコリ

ンズの牧師館で、エリザベスに会ったダーシーはついに彼女に向かって恋の告白をすることになる。

「ずいぶん抑えに抑えたのですが、もう駄目です。この気持はどのようにしても抑えられません。言わせて下さい、どんなに心の底からあなたを愛しているか」(II, xi)。

この言葉に続けて彼はいかに強く彼女を愛してきたかを熱烈に語った。しかし、彼の言ったのは、それだけではなかった。彼女を自分より一段低い存在と見る考え、彼女と結びつくことは人間の下落だということ、家族的障碍ということが、自分の感情に反対する理性が常に持ち出す理由だったということなどをも熱心に述べたのであった。ダーシーとしては当然言っておくべきことと思われたのであろうが、これをエリザベスが恐れ入って聞いているはずはなかった。いわんや彼女は、最初に受けたダーシーは傲慢な男だという印象を持ち続けているのである。彼女は顔を真っ赤にして、この風変わりな求婚を断ったのであった。

このことのあった翌朝、エリザベスは付近の小径を散歩していて、ダーシーに遭い、手紙を渡される。それは長い長い手紙であったが、要点は二つだった。その一は、エリザベスの姉ジェインがピングリーを愛しているのをダーシーが引き裂いたというエリザベスの非難に対する弁解、その二は、ウィッカムに対してダーシーが不当な扱いをしたというウィッカムの言い分に対する反駁であった。第一の問題については、ジェインがピングリーを愛しているとしても、そう強烈なものではなく、一過性のもののように見えた、だから彼女の親戚たちや家族が好ましくないで、二人の間を遠ざけても、さほど酷ではあるまいと思ったのだということであった。第二の問題については、ウィッカムが公言していたこととは裏腹に、彼が如何に恩知らずで破廉恥な行動を重ねてきたか、その上、ダーシーの妹ジョージアナを誘惑して駈け落ちしようとさえしたことが記してあった。この手紙を読んだエリザベスが、最初から何の疑念も持たずに、書いてあることの全部を信じたわけではなかったが、しかし、繰り返して読むうち、その内容の真实性が胸に浸み入るのを感じたのであった。その根本には、自分を理解してもらおうというダーシーの熱意に対するエリザベスの感謝の気持もあった。

それから二カ月後エリザベスはガーディナー夫妻と共にダービシャーを旅行し、ダーシーの所領であるペンバリー莊園を訪れる機会を得た。その監理人から庭園や館の中を案内してもらい、宏壮で豪華ながら気取らぬたたずまいに心を打たれる。監理人から聞かされた、ダーシーの使用人や村人に対する優しさの話も彼の人柄に対する彼女の考えを変えさせるものであった。エリザベスたちが立ち去る前にダーシーが旅先から帰って来て、彼女に対してのみならず、ガーディナー夫妻にも鄭重に対応する。商人を軽蔑しているはずのダーシーとしては、これは驚くべき変化であった。また、ダーシーはエリザベスに妹のジョージアナも紹介する。

この後、リディアの駆け落ちなどの事件があるが、やがてダーシーとエリザベスは結婚することになる。初め、ダーシーの傲慢さを嫌っていた彼女が、彼と結婚する気持になるまでには、幾変転があったわけであるが、いつから彼を愛するようになったのであろうか。エリザベスからダーシーに対する恋を打ち明けられたジェインは、いつから彼に愛情を感じるようになったのか尋ねる。それに対するエリザベスの答えは次のようなものであった。

「さあ、ほんとに少しずつそうになってきたっていうわけねえ。だから、自分でもいつ始まったのかよく分からないのよ。でも、あのペンバリーの美しいお屋敷を初めて見せていただいたときからだと思うわ」(Ⅲ, xvii)。

この答えに対して、ジェインは「もっと真面目に」と要求するので、では、エリザベスは上の答えを冗談に言ったのかということになりそうであるが、果たしてどうであろうか。森に蔽われた高い山々を背景に建っているペンバリーの館を見渡したとき、エリザベスは「こんな邸宅の女主人になるのも、まんざらではない!」と思った。また、邸内の部屋を次々に見て回っているうち、「このお邸の、わたしが女主人になってたかもしれないわけねえ!」とふと思った(Ⅲ, i)。また、これより以前、別のコンテクストにおいてであるが、エリザベスはガーディナー伯母に向かって次のように言ったことがあった。

「ねえ、伯母様、結婚の動機について、欲得づくだの、慎重だの
って言いますが、一体どんな違いがあるんでしょう。慎重さがど
こで終わって、貪欲がどこから始まるっていうのかしら？」(II,
iv)。

上に見たようなエリザベスの感想から推して、彼女の心がダーシーに
傾いた要因の一部分は、ペンバリーを見たことにあると言えよう。(コ
リンズとの場合は、こういう考慮が入る余裕がないほど、彼女は彼の愚鈍さを軽
蔑していた。)

一方、ダーシーについてであるが、彼がエリザベスに最初に求婚して
断られた頃から、彼の態度は目に見えて慇懃になってくる。これはエリザ
ベスを始め、今までの彼を知る多くの人々が驚いたところであった。恋
はこれほどまでに人間を変えるのだと言えるかも知れない。しかしまた、
ダーシーの豹変ぶりは、余りにも唐突で不自然だとする批評も多い⁵⁾。

(e) ビングリーとジェイン

ロンボーン (Longbourn) から三マイルの所にあるネザフィールド
(Netherfield) の邸に、若く金持ちで独り者のビングリー氏 (Bingley) が
移り住むことになったと聞いたとき、ベネット夫人の張り切りようは大
変なものだった。娘たちの結婚相手を探すことが唯一の生き甲斐と心得
ている彼女は、五人の娘たちのうちのどれかと、ビングリー氏を結びつ
けることを固く決心したのである。

やがてビングリーが妹たちや友人ダーシーを伴ってネザフィールドに
やって来ると、ビングリー家とベネット家の人々が、舞踏会、晩餐会等
の折に顔を合わせる機会が生じてくる。

最初の舞踏会で、美人の長女ジェインは大もてで、ビングリーは二度
も彼女と踊った。彼は早くもジェインに惹きつけられたのである。その
後、二人は互いに好感を抱くようになるが、どちらも、心の中を相手や
第三者に向かって、はっきり告げるような性質ではなかった。

妹のエリザベスは、ジェインの心の中を見て取っていたが、彼女の控
え目な態度は結構なことと思っていた。あるとき友達のシャーロットを
相手にこのことを話題にすると、シャーロットは次のように言うのであ
った。

「そうやって世間の目につかないようにするのは、いいことかも知れないわね。でも、あんまり用心するのも、どんなものかしら。もし、肝心な相手にまで、同じように巧く愛情を隠してしまったら、相手の心をこちらに向けさせる機会は出来ないんじゃない？……ちょっと好きになるなんてのは、ざらにあることよ。でも、何かこちらの気持を引き立たせるものがないのに、そのまま、まっしぐらに恋にまで突き進むほどの勇気のある人は、そういないと思うわ。十中八九まで、女性は実際感じている以上の愛情を見せる方がいいのよ。ビングリーさんは確かにお姉さまが好きのようね。でも、お姉さまの方から手を貸してあげないと、あちらさまも、ただ好きという以上に進まないと思うわ」(I, vi)。

シャーロットは一般論としてこの意見を述べたのであったが、ジェインに関しては、正にこの警告が的中することになる。それは後に述べる。

ビングリーの妹カロライン (Caroline) に招待されてネザフィールドを訪れたジェインは悪性の風邪を引いて、数日間先方に留まって静養しなくてはならなくなる。これは正にベネット夫人の思う壺であった。事実、この滞在中にビングリーはジェインのために何くれとなく気を遣ってくれ、二人の理解は急速に近づいた模様であった。

ところがそれから間もなく突然、ビングリー一家はネザフィールドを引き上げてロンドンへ旅立ってしまう。ジェイン宛てのカロラインの手紙によれば、一家はいつネザフィールドへ戻るか分からない。永久に戻らないかも知れないということであった。

その後、ビングリーからは何の手紙も来なかった。ジェインは、妹のエリザベスを相手に、ビングリーの気持について種々憶測するが、勿論本当の所は分からない。たまたまロンボーンを訪れた伯母のガーディナー夫人に誘われて、ジェインは気分の転換のためにもロンドンの伯母一家の客になる。彼女はカロラインにロンドンに来たことを知らせる手紙を出したが返事は来なかった。また、もしかして、ビングリーが彼女の所在を知って何かの連絡をして来はしまいかという期待もないではなかったが、それも空しかった。しかし、三カ月ほどして再びロンボーンに戻った彼女は、思いがけずダーシーと一緒に此所に帰って来たビング

リーに会い、事情が判明し、ついに結婚に至るのである。

前にも見たように、心情を積極的に表にあらわさないジェインの態度から、ダーシーは、ジェインのビングリーへの恋は深いものではないと考えたのであった。そして、彼一流の階級意識から、ビングリーはジェインと結婚しない方がよいと考え、二人の仲を割くことにしたのであった。ジェインがロンドンに来ていることをダーシーは知っていたが、ことさらにビングリーには知らせなかったのだということも、ダーシーは後になって説明した。前にも見た、女性の愛情の表出についてシャーロットが言ったことは、ジェインに関しては、あるいは、ダーシーのような種類の観察者に関しては必要な忠告だったと言えよう。シャーロットのように、結婚に愛を前提条件とは考えぬが、実際以上に相手の気持をかき立てるような愛の表出を勧める女性がいる一方、ジェインのように心は愛に満ちていながら、これを外部に表そうとしない女性もいるということは、人生の一つの皮肉であろう。

さて、ダーシーの観察は兎も角として、ビングリーは、ジェインを愛し、また、彼女に愛されていると知りながら、なぜ、ダーシーの言うなりになって自主性のない態度を持ち続けたのであろうか。

カロラインから、兄と共に当分ロンドンに住むつもりである旨の手紙がジェイン宛に来て、エリザベスもその要旨を知らされたとき、彼女は次のように感じる。

ビングリー氏に対しては前々から好感を持っていたが、しかし、
こうも気分屋で、定見がなく、周りの者たちの画策のままになって、自分の幸福を彼らの気まぐれの犠牲にするようでは、私は腹に据えかね、軽蔑したくもなる。それも、彼の幸福が犠牲になるというだけのことなら、自分がいいと思うように振る舞うがよからう。
ところが、これにはジェインの幸福までかかっているのだ。それは彼もちゃんと分かっているはずなのに (II, i)。

結局、二人は結婚するのだから、「終わりよければすべてよし」とも言えるかもしれないが、多くの読者は、その過程におけるビングリーの態度に対してエリザベスと同じ感想を持つのではあるまいか。

そう言えば、ダーシーとエリザベスが婚約した後、次のようなことが

ある。

「ビングリーさんという方は、なんて楽しい方でしょう。何でもあなたの言いなりになって、ほんとに素敵なお友達をお持ちですわね」とエリザベスは言おうとしたが、止めておいた。ダーシーは一度も人からからかわれたことなどない人だから、今始めるのは少々早すぎると気づいたのである (Ⅲ, xvi)。

ビングリーの自主性のなさは、作者自身気になっているのかも知れない。

(2) カリカチュア

この小説の登場人物には、程度の差こそあれ、戯画化されていると思われるものが相当多い。ベネット夫妻は揃って誇張されているし、夫妻の三女のメアリーが学識と音楽の素養を所かまわず、ひけらかすのも常軌を逸している。また、ナイトの位が自慢で、宮中の仕来りを事あるごとに話題にするサー・ウィリアム・ルーカス (Sir William Lucas) も異色ある存在である。中でも特に目立つのがキャサリン・ディ・バーグ夫人 (Lady Catherine de Bourgh) とウィリアム・コリンズとである。

(a) キャサリン・ディ・バーグ夫人

エリザベスはコリンズ家に滞在中、キャサリン夫人の邸に招待されるが、夫人はダーシーの叔母に当たる。夫人については次のように述べられている。

キャサリン夫人は背が高く、恰幅のいい婦人で、目鼻立ちのはっきりしたその顔は、かつては美人だったろうことを思わせるものがあった。彼女の態度は、温かく人を迎えるという風ではなく、対応の仕方にも、客に身分の低さを意識させまいというような配慮は見られなかった。黙っていても威厳にあふれているというのではなしに、話す言葉の一つ一つが、自尊心に裏づけされて高圧的な調子で語られた (Ⅱ, vi)。

しかし、この威圧は、エリザベスに対しては効果がなかった。

エリザベスは、夫人が異常な才能とか、稀有な徳行とかによって、畏敬に値する人だとは全然聞いていなかったから、単なる富と地位の立派さというのなら、別に恐れおののく必要はあるまいと思っていた(II, vi)。

夫人はエリザベスに、彼女の生い立ちのこと、家族のこと等を尋ねるが、大方失礼な質問ばかりであった。殊にエリザベスがうちには家庭教師はおりませんでしたと言うと、夫人は、「じゃ、どなたがお教えになったの？ 誰がお世話なすったの？ 家庭教師もいないのじゃ、あなた方、きっとほったらかしでいらしたのね」(II, vi) という軽蔑し切った返事であった。

何を言われても、エリザベスの応対がまったく平静だったことは夫人に不満を覚えさせたことであろう。しかし、ともかく、このときの訪問は何事もなく終わったが、夫人との対面は一度では済まなかった。

ジェインとビングリーとの婚約が決まってから一週間後、キャサリン夫人がベネット邸を突然訪ねて来たのである。夫人は、ジェインの婚約に次いで、エリザベスとダーシーが婚約したそうだという噂を聞いて、急遽四頭立の馬車を駆けつけたのであった。夫人がエリザベスに言いに来たことは、要するに夫人の娘アン(Anne)とダーシーとは親同士の合意によって幼いときから許婚の間柄である。そこへ今になってエリザベスが割り込むなどは絶対許せぬということなのである。夫人は興奮して息巻くが、エリザベスの冷静で論理的な受け答えにたじたじとなる。例えば自分の身分を考えなさいという夫人の攻撃に対して、エリザベスは「ダーシーさんは紳士、そして、私も紳士の娘です。その限りじゃ同等じゃありませんか」(III, xiv) と答える。また、エリザベスの母や叔父、叔母の俗っぽさが障碍になるという指摘には、「私の親戚がどうだろうと、ダーシーさんさえ、それにご異存がなけりゃ、あなたにとってなんの問題でもないじゃございませんか」(III, xiv) と答える。最後に、エリザベスの、ダーシーと婚約はしていないという言明に、夫人は、これからも決して婚約はしないと約束せよと迫るが、勿論エリザベスは断る。

後にダーシーは、この二人の会見の話を夫人から聞き、それで初めてエリザベスの本当の気持が分かり、彼女に最終的に求婚する決心をするのである。夫人の、二人の仲を割こうという自己中心的な足搔きは、甚だアイロニカルな結果に終わったことになる。

キャサリン夫人の考え方について、タナーは次のように述べている。

夫人は、ジェイン・オースティンが「位階の威厳」と呼ぶものを持っていて、ただ「位階の無思慮」を持っているのみである。彼女は、他の人々に命令し、自分の「計画」……を人々に押しつける資格を自分の地位が与えてくれるものと思い込んでいる。彼女は自分のやることの全体的な意味について十分に考えたことも、思い回らしたこともない。熟考する力がないために、人々に苦痛を与えることになるのである⁶⁾。

周囲の者たちから、面と向かって反対されたことも、批判されたこともない場合、上流階級からこういう種類の人物が現れるのは当然といえよう。

(b) コリンズ

コリンズが最初ジェインに、次にエリザベスに求婚した次第については既に見た通りである。彼はベネット家の娘たちが美人であると聞き、そのうちの誰かと結婚したいという意図でベネット家の客となったのであった。但し、来訪の表向き理由は、ベネット家とコリンズの父との間に多年不和があったが、既に父は他界し、自分が聖職に就いたのを機会にベネット家と和解したいということ、もう一つは、自分がベネット家の限定相続人として損害をおかけするのが心苦しいから、何らかの方法で補償したいということであった。このように彼の言うことは表面上は非常に立派な大義名分を備えている。来訪の意図をベネット氏に告げて来た手紙も、甚だ切り口上の、尊大さと卑屈さとを併せ含んだものであった。エリザベスに執拗に求婚しながら、見込みがないと知ると、あっと言う間にシャーロットと婚約する未練のなさ、変わり身の速さは既に見た通りである。

更にコリンズの表現の特徴は、リディアが駆け落ちしたとき、彼から

ベネット氏に送られて来た「見舞い状」に表れている。その中には次のような言辞も見える。

「この度の事態に比するならば、御息女の死といえども、なお祝福すべきかとさえ存ぜられます。……更に御息女の放縦は、親御様の誤れる過度の溺愛の結果生じたるものと見受けられます故、遺憾の念は殊更でございます。……せめてもの心やりに、不肖の御息女は永久に貴殿の愛情の圏内より追放せられ、この不始末の報いを自ら刈り取るに任せられんことを御忠告申し上げます」(Ⅲ, vi)。

この言い方は大変厳しいが、その厳しさが、かえってコリンズが心の底では何も感じていないことを示しているように思われる。感じているとすれば、それはベネット氏に対する勝利感であり、空疎な宗教的雄弁は、その得意さの表れであろう。

その後、コリンズ氏から来たもう一通の手紙は、エリザベスとダーシーの婚約の噂を聞いたが、二人の結婚には、彼が眷顧を受けている実力者キャサリン夫人が絶対不承知だから思い止まるようにという忠告の手紙であった。彼は夫人に対する忠誠心のみ強く、自分の演じている道化役の間抜けさ加減が分からないのである。

キャサリン夫人もコリンズもカリカチュアであり、極言すれば、E. M. フォースター (Forster) のいわゆる flat characters である。こういう人物たちが、エリザベスその他の round characters の間に伍して齟齬をきたさぬところに、作者の腕前が見られると言うべきであろう。

註

- (1) Darrel Mansell: *The Novels of Jane Austen, An Interpretation*, p. 98
- (2) Michael Williams: *Jane Austen, Six Novels and Their Methods*, p.189 (Note 17)
- (3) Tony Tanner: *Jane Austen*, p.180
- (4) Michael Williams, *op. cit.*, p.69
- (5) Konneth L. Moler: *Jane Austen's Art of Allusion*, pp.93-94
- (6) Tony Tanner: *op. cit.*, p.124